台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 185-214
2012-02-20 收稿，2012-05-23 通過刊登

影響在台灣的台日跨國婚姻家庭子女日語能力維持、發展因素之探討
──以日常生活中的日語語言活動為中心──

伊藤佳代*

摘要

本研究主要從影響語言能力的各種因素當中，特別擷取屬於家庭教育一環的「日常日語使用」、「日語讀寫練習」等日常生活言語活動，探討其如何影響台日跨國婚姻家庭子女的日語會話能力。研究方法則是對於台日跨國婚姻家庭的日籍母親採取紙本問卷調查，對其子女則是實施 OBC 測驗並以統計學方式分析之。

由本研究所得結果可知，在台灣的台日跨國婚姻家庭中，使用日語的機會頻繁，且多數家庭持續性的對其子女實施日語的聽說讀寫等學習。此外，本研究結果亦顯示台日跨國婚姻家庭的子女，其日文會話能力水準與中文會話能力相當，且其日文會話能力，與其是否就讀臺灣在地學校亦或日本人學校之關聯性並無顯著差異。

經由本研究 OBC 測驗得知與日語能力相關的各種言語活動包括下列幾項：1、兄弟姐妹間日語使用的多寡；2、其子女可用日語交談的玩伴之有無；3、對父母親的日語使用情況；4、日語讀寫練習量的多寡；5、以日文書寫日記或書信量的多寡。最後，本研究的結果亦得知台日跨國婚姻家庭的父親對子女、或是子女對父親之間混用中日文者，其子女在日語能力方面則相對顯得較低，此顯示雙重語言的混用對日語會話能力的提升似乎並無正面影響。

* 台灣國立成功大學台灣文學系博士班四年級
台灣國立屏東科技大學教學資源中心專案講師

關鍵詞：在台台日跨國婚姻家庭子女、日常日語使用、日語讀寫學習、影響日語能力的因素

A Study of Factors Affecting Japanese Maintenance and Development for children of Japanese-Taiwanese Intermarriage in Taiwan

Ito, Kayo*

Abstract

This article explores not only how much Japanese-Taiwanese families in Taiwan provide educational support to help their children to maintain Japanese language ability but also the kind of educational support they have provided and which are most effective. Among the variety of support to help children to learn the Japanese language, this article deals with two factors. They are stated as follows: children using Japanese in their daily life and educational programs that supplement home use of Japanese, specifically reading Japanese books and studying books written in Japanese. The analysis section of the article proves using the Japanese language with siblings is effective in maintaining the language, along with socializing in Japanese and frequently reading Japanese books and studying Japanese, especially writing letters or keeping a diary in Japanese. Another finding is that mixing both Japanese and Chinese between children and their non-Japanese speaking father has a negative effect on children's Japanese oral skill.

Keywords: children of Japanese-Taiwanese intermarriage in Taiwan, use of Japanese in daily life, reading and writing Japanese, factors affecting Japanese oral skill

* ph.D course Department of Taiwanese Literature. National Cheng kung University Lecturer of Center for Teaching Excellence. National Pingtung University of Science and Technology

在台日台国際結婚家庭子女の日本語能力保持・伸張に関わる要因について
―日常的な日本語言語活動を中心に―

伊藤佳代*

要旨

本研究は言語能力に影響するさまざまな要因の中で、特に家庭で行われる教育的サポートである「日常的な日本語使用」、「日本語の読み書き学習」の日常的言語活動を取り上げ、それが日本語会話力に如何に影響しているかを明らかにするため、母親への質問紙調査と子女へのOBCテストを使用し統計分析を行った。

その結果、在台日台国際結婚家庭内では日本語が日常的に使われ、また多くの家庭が日本語による読み聞かせや日本語の勉強を継続的に行っていることが分かった。そして子女の日本語会話力は、中国語会話力と同等レベルまで達していることが明らかにされた。また日本語力は通学校が現地校か日本人学校との間には差は見られなかった。さらに日本語力と関連が認められた言語活動は、1.兄弟間の日本語使用量、2.日本語を話す友人の有無、3.父親・母親に対する日本語使用状況 4. 日本語の読み書き学習量 5. 日本語で日記・手紙を書くことである。また父から子、或いは子から父の間において日中両方を使用する子女の日本語得点が低かったことから、二言語混用は日本語能力に良い影響を与えないことが示唆された。

キーワード：在台日台国際結婚家庭子女、日常的な日本語使用、読み書き学習、日本語能力への影響要因

* 台湾国立成功大学台湾文学学科　博士課程４年生
台湾国立屏東科技大学教学資源中心専案講師

在台日台国際結婚家庭子女の日本語能力保持・伸張に関わる要因について
―日常的な日本語言語活動を中心に―

伊藤佳代

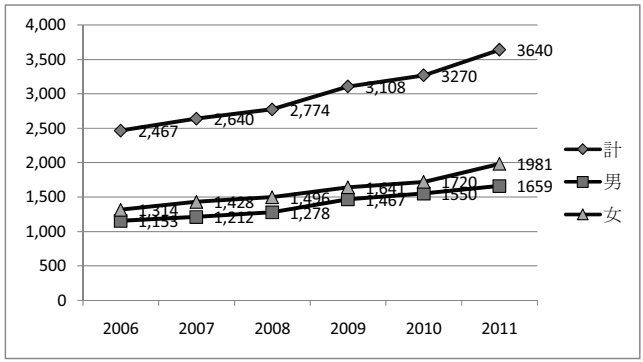
一、研究背景

台湾は閩南系、客家系、1947年の光復により大陸より台湾にわたった外省人、またマレー系の原住民など複数の文化背景を持つ人々が住んでいるところである。そのため台湾国内でも文化背景が異なる者の使用言語はそれぞれ異なり、外省人は中国語、閩南福建人の閩南語、また客家人は客家語を、また原住民はそれぞれの部族の言葉を持ち、実に多様な言語使用状況がみられる。

さらに台湾は周知のとおり日本による植民地統治経験を持ち、それにより当時日本教育を受けた世代の人々は日本語を話すことができる。また90年代の日本ブームにより若者の間でも日本の文化や日本語に対して関心が高い。さらに地理的条件も加わり、経済貿易方面においても深い関わりを持つ日台両国間は、歴史、文化、経済等様々な方面において密接な関係を持つ。そのため一般的に台湾は親日的であると言われ、台湾社会において概して日本語は優勢言語とされている（陳麗君:2007）。このように台湾は複雑な歴史背景により、自国内に多様な言語が存在し、その独自の言語環境と言語観が見られる場所である。

そのような複雑な言語環境である台湾に、結婚によって移住する日本人が増えている。2011年12月の台湾内政部の統計によると結婚によって台湾に住む日本人の数は3640名（男性1659名、女性1981名）となっており、その数は年々増加している。

図 1　在台日本籍配偶者人数の推移[1]



このような近年の在台日台国際結婚増加の傾向は日台両地域の社会情勢やそれに伴う人的移動等その時の社会変動に影響を受け、結婚に至るまでの経緯は各年代によって異なるという。先行研究によると、1980 年代半ば以前は台湾人男性の日本留学による国際移動によって日本人女性と知り合い結婚するケースが多かったが、1990 年代以降日本人の海外留学が一般的になり、日本人女性の台湾や欧米への国際移動が加わって、台湾や第三国で知り合い結婚に至るケースが増加したという（竹下:2004:46)。また金戸（2007）は 1990 年代において台湾では日本の大衆文化や商品が大量に流入され、日本ブームが起き、それと同時に教育の大衆化が進んだため、日本に留学する台湾人が増えたことも、近年の日台国際結婚の増加を促した一因としている。

このように在台日台国際結婚は知り合った国を基準に「台湾・日本及び第三国」の 3 ケースに大別できる。この知り合った国がどこであるかということは、在台日台国際結婚における家族成員間の使用言語を決定する重要な要素である。このことは夫婦間の会話は台湾や第三国家で知り合い結婚するケースが増えた 90 年代以降の若

[1] 出所）内政部入出國及移民署全球資訊網 http://www.immigration.gov.tw/np.asp?ctNode=29698&mp=1（民國 98,99,100 年 12 月外籍配偶人數與大陸（含港澳）配偶人數）より筆者作成

い世代ほど日本語使用が減少し、中国語（または台湾語）や知り合った国の言語使用が増加する傾向があるという竹下（2004）の調査結果からも裏付けられている。

筆者自身もこれまで多くの在台日台国際結婚の日本人女性に出会う機会があり、上記竹下の調査で示された結果と符合する状況にある人々から話を聞くたびに常に感じたことは、それぞれの家庭によって実に様々な言語使用の状況が見受けられる、ということであった。例えば日本人女性の台湾移動により結婚したケースでは、女性が中国語を話せる場合が多いため、夫婦間の会話は中国語を使用する、または台湾人男性が日本語を話せる場合は日本語を使用することも多い。そして第三国家で出会い結婚した家庭は、夫婦間は英語やスペイン語等出会った国の言葉で会話し、母子間では日本語を、父子間では中国語を使う。また結婚後日本人女性は中国語を、台湾人男性は日本語を習得し家族成員間の使用言語が変化する家庭もある。このように出会いの場所が家庭内使用言語に影響し、その結果家庭により様々な言語使用状況が見られるのである。

しかしその一方でどの家庭にもほぼ共通して言えることは、日本人の母親は子に自らの母語である日本語を継承させることに大変熱心であるということだ。

国際結婚家庭や自国を離れ海外で生活する人々にとって自分の母語を子に継承していくことは、家族間のコミュニケーションや文化の継承、また二言語習得を目指す教育的価値獲得等の重要な意義を持つ。在台日本人母・台湾人父の国際結婚家庭においては子どもを台湾の現地校に通わせることが多いため現地語である中国語が強くなる傾向があり、母親たちはそうした環境に置かれている子どもの日本語能力を保持・伸張するために様々な教育的活動に取り組んでいる[2]。そして母親たちは、子の日本語はいったいどれほどのレベル

[2] 現在台湾各地（台北、桃園、新竹、台中、嘉義、台南、高雄）では、日本人母親たちのボランティアによる日本語教室が週末の時間を利用して開かれており、ここからも日本人母たちの子供への日本語継承の熱意が窺われる。（2012 年 1 月現在）。

なのか、またどうしたら日本語を伸ばすことができるか、そして効果的な方法はあるのか、という課題に関心を持っているのである。

二、研究目的

二言語環境にある子供たちの言語能力についての先行研究は、中島和子（1985）のカナダ在住の日本籍児童を対象にした研究、在日外国人の二言語研究では朱晛淑（2001）の在日韓国人児童、李美静（2006）穆紅（2009）の在日中国人児童を対象にした研究等がみられる。これらの研究によると二言語環境にある子供たちの言語能力の保持・伸張に関わる具体的な要因には、入国年齢、滞在期間という履歴的要因、子どもの性格や本人の言語に対する志向等個人の心理的要因、そして日常的な二言語の使用状況、また読み書き学習を行っているか等家庭やコミュニティでの教育的サポートという対人社会的な要因などがあるという。のように子女の言語能力保持・伸張にはさまざまな要因が関係しているが、このうち入国年齢、滞在期間といった履歴的要因は家庭の当時の状況や事情によって決定されるため調整が難しく、既存の事実としての固定的要因であるといえる。また子の性格や本人の言語に対する志向等個人の心理的要因も、例えば子に日本語に興味を持つよう親が仕向けることは不可能ではないが、それでも性格といった先天的性質を外的な力によって変化させることは容易なことではない。これらに対して教育的サポートである対人社会的な要因は、どの家庭においても親の意志により実践可能であり、またどのような教育的配慮をどのくらい行うのかによって、子の言語能力を変化させる可変的要因であるといえよう。

また言語継承の要因・メカニズムについて、Landry&Allard の理論によると、二つの言語を使用する環境にいる子供が二言語能力を獲得するには、家庭、学校、社会の各環境の間でバランスの取れた教育支援が必要であるという。在台日台国際結婚子女について当てはめれば､台湾の社会環境においては中国語が主要言語であるため、

日本語はバイタリティが低い。そのため日本語を強化するには家庭や学校及び社会環境の中での日本語使用を増やし、中国語使用とバランスをとることにより、二言語が可能になるといえる。したがって親が子にどれだけ教育的配慮を行うかによって子の日本語能力が決定されるのである。そのため在台日台国際結婚子女にとってどのような教育的サポートがバイタリティの低い日本語をより伸張できるか、または保持できるかという対人社会的な要因を解明することは意義ある課題であると考える。

日本と台湾間の国際結婚家庭を対象とした言語継承に関する先行研究は多くはない。竹下修子（2004）は国際結婚社会学の視点から日本人女性へのインタビュー調査を行っている。それによると、「日本人妻たちの大半が、世代に関係なく、子供は日本語が話すことができる、または理解できると語っている（竹下 2004：48）」と述べ、語りを通して日本人妻の言語教育観を考察した。また本間美穂（1996, 2002）の研究でも、主に日本人配偶者への聞き取り調査を通して日台婚姻家庭の継承日本語教育の現状と問題点について考察している。本間は在台日台国際結婚家庭が子女に日本語継承教育を行う際の問題点として、家族の理解不足等家庭レベルのもの、教育制度の充実という行政レベルの問題が存在すると指摘した。伊藤佳代（2011）は日本女性配偶者の台湾への愛着、定住の決意、言語能力の違いが家庭言語や子女言語教育観にも反映されていることをインタビュー調査により明らかにしている。また陳麗君（2007）は日本人配偶者とベトナム女性配偶者家庭を対象に、家庭内使用言語についての比較調査を行った。その結果、8 割以上のベトナム女性が子女との会話で中国語を使用していたのに対し、日本人配偶者はその 6 割が母語である日本語を使用していることが分かった。この結果に関して陳は日本籍配偶者は子どもの言語教育に対し積極的に取り組んでいると述べている。そして次に子女に対して言語調査を行った研究としては、本間美穂（2002）、李若玫（2005）、服部美貴（2009）の調査がみられる。本間（2002）は日台国際結婚子女・日本人児童・台

湾人児童に対し基本語彙調査を行ったところ、日台国際結婚子女は日本人・台湾人児童に比べて日本語・中国語のいずれの語彙量も劣るという結果が出た。しかしこの語彙調査では日本国内の日本人を対象にして作られた調査材料を採用したため、文化的バイアスが統制できず、そのため調査数値の信頼性という点においていささか疑問が残る結果となっている。そして李（2005）の研究では、日台国際結婚の子女と母親の中国語と日本語両言語のコード・スイッチングの言語使用現象を母子の会話分析によって考察した。その結果母子の会話において文内コード・スイッチングの使用頻度が高く、それも名詞において頻度が高かったこと、また母子の対話の中で、意思疎通が達成できない「コミュニケーション未達成」現象が見られたことが明らかにされた。しかしこの調査対象者が母子それぞれ1名のみとサンプル数が少ないため、ここでの結果を一般化することは難しいだろう。そして服部（2009）の研究では、OBC会話力テストを用いて日台国際児の日本語誤用について調査している。その結果日台国際児の日本語の誤用は文法の誤り、語彙不足や敬語の使用の不自然さ、中国語の干渉があることが明らかにされた。服部は日本語の誤用の種類や頻度には個人差が大きく、環境や性格による日本語使用の影響も少なくないと指摘している。

以上日台国際結婚家庭の言語継承に関する主な先行研究について見てくると、先行研究の数自体が少ないことに加え、その研究内容が母親への聞き取り調査から言語継承教育の状況を概観するものが多く、子女の実際の言語能力や日本語能力に影響する要因など子女を取り巻く具体的な言語状況調査を行った研究に限ってみると、その数はまことに微々たるものである。つまりこの方面の研究はまだ解明の余地がおおいにあるといえよう。

そこで本研究は、在台日台国際結婚家庭子女の日本語能力に影響する要因を明らかにし、日本語能力を伸張・保持するための効果的な方法を探ることを目的とする。その方法として本研究では上記先行研究で示された日本語能力に影響する要因の中でも、教育的サポ

一ト面の対人社会面的要因を取り上げることにする。具体的には「日常的な日本語使用」、「日本語の読み書き学習」の二つの日常的言語活動が子女の日本語能力にどう影響を与えているか、その関連性を分析する。それによって、どのような方法が日本語能力を効果的に伸ばすことができるかを明らかにすることが最終的な目標である。

三、研究課題と方法

（一）研究課題

まず本研究の課題を記す。

１、在台日台国際結婚家庭子女の日本語による日常的言語活動の実態は如何なるものか。

２、在台日台国際結婚家庭子女の日本語能力は如何なるものか。

３、日本語能力に影響する要因として、日本語による日常的言語活動である「日常的な日本語使用」、及び「日本語の読み書き学習」と子女の日本語能力とは関係があるのか。また関係があるとすれば具体的にどのような活動が日本語能力に影響するのか。

以上三項目について分析及び考察を行う。

（二）調査材料

まず家庭での言語使用、言語学習状況、日本語学習環境について調べるため、母親に対し質問紙調査を行った。質問項目は朱（2002）、穆紅（2009）カナダ日本語教育振興会（2000）を参考に日台国際結婚家庭への聞き取り調査から明らかにされた言語使用状況に合わせて修正し作成した。

次に子供の日本語・中国語の各言語能力の調査は OBC テストを使って行った。OBC テスト（Oral Proficiency Assessment For Bilingual Children）は、カナダ日本語教育振興会（the Canadian Association for Japanese Language Education）により 6 歳から 15 歳くらいのバイリンガル年少者の会話能力を測定するために開発されたインタビュー・テストである。そのため本研究の中で考察する「日本語能力」とは、聞く・話すといった会話面の能力を指す。またこのテストは

二言語・二文化環境にいる子供を対象としているため、質問は文化バイアスの影響を受けないように工夫されている。

OBC テストは導入会話、基礎タスク、対話タスク、認知タスクの 4 つの部分から構成され、会話力を「基礎言語面」「対話面」「認知面」の三側面から測定するようにできている。本研究ではそれら三側面を質的に 5 点・3 点・1 点・0 点の 4 段階評価をした質的評価の得点を用いる。

OBC テストは 2011 年 1 月から 2011 年 5 月にかけて、調査協力者指定の場所、協力者自宅、及び筆者宅マンション談話室にて行った。インタビュー所要時間は一人一言語につき約 15～25 分で、すべて IC レコーダーに録音した。母親には質問紙の記入を依頼し、後日郵送か直接回収した。また回収後質問項目について電話やメール、または直接会って確認・補足を行った。日本語による OBC テストインタビュー実施と採点は筆者が担当し、同時に行った中国語での OBC テストインタビューとその採点は、台湾の大学で日本語教育に携わっている台湾籍男性教師一名が行った。

（三）調査方法

1、「会話力の評価」

OBC テストは会話力を「基礎言語面」「対話面」「認知面」の三側面に分けて 5 点（できる）・3 点（普通）・1 点（必要最低限）・0 点（まったくできない）の 4 段階で質的に評価した。「基礎言語面」の評価項目は「1.発音の正確度、2.語彙の使用、3.文の生成、4.文法的正確度、5.文のタイプ・質」の 5 項目、「対話面」は「1.聴解力、2.会話への参加態度、3.対話の流暢度、4.タスクの達成度 5. 丁寧さ」の 5 項目、「認知面」は「1.話のまとまり、2.内容の豊富さ、3.語彙の質、4.段落とその質」の 4 項目あり、計 14 項目、合計点は 70 点満点である。評価にはインタビューの録音データを用いた。

2、「日本語による日常的言語活動」

本研究では先行研究を踏まえて「日常的な日本語使用」と「日本語による読み書き」の二つの尺度からなる「日本語による日常的言

語活動」を、日本語能力に影響する要因として分析に用いる。

この「日本語による日常的言語活動」の第一の尺度である「日常的な日本語使用」については、穆紅（2009）の質問項目を参考に、日台国際結婚家庭状況に合わせて修正した下位項目「未就学時の子供・親の言語使用、幼稚園時の子供・親の言語使用、現在の子供・兄弟間・親言語使用、日本語を使用する友人の有無」からなる計 15 項目を設定した。また第二の尺度である「日本語による読み書き」についても穆紅（2009）の先行研究を参考に、識字完了年齢、小学校入学前までの日本語読み聞かせ、現在の読書[3]・メディア視聴、日記手紙を書くことの有無、日本語の勉強、日本語での教科学習の有無」からなる計 8 下位項目を設定した。これらの質問は 3～5 段階評価を採用した。

これら各尺度内の下位項目合計平均値、および各尺度の下位項目評定値と日本語 OBC テストの質的得点を用い相関分析、T 検定、および分散分析を行い関連性を明らかにする。分析・統計解析には SPSS12.0 中国語版を用いた。

（四）調査対象者

本調査は台湾南部（高雄、台南、嘉義）に在住する日本人母、台湾人父を両親に持つ児童 32 名とその母親 26 名の協力を得て行われた。そのうち児童 3 人、母親 2 人が調査材料不備のため調査対象からはずしたため、実際に分析対象となったのは児童 29 名、母親 24 名である。

調査児童の平均年齢は 8.2 歳、平均滞在期間は 7.9 年、平均入国年齢は 0.3 歳である。つまりほとんどの児童が 0 歳時にはすでに台湾に居住していることになる。また通学する学校は 80％以上が現地小学校、13％が日本人学校、3％が英語で授業を行う現地校国際クラスに通っている。児童の基本属性を以下の表 1 に示す。

[3] 現在の読書の項目は、「本を読む」・「漫画雑誌を読む」の二つの質問からなる。

表 1　調査対象の属性（N=29）

滞在期間	5 年未満	1 名（3.4%）	性別	男子	16 名（55.2%）
	5～10 年	28 名（96.6%）		女子	13 名（44.8%）
入国年齢	0 歳～4 歳	28 名（96.6%）	学年	1-3 年	22 名（75.9%）
	5 歳以上	1 名（3.4%）		4-5 年	7 名（24.1%）
学校別	現地小学校	24 名（82.8%）			
	国際クラス[4]	1 名（3.4%）			
	日本人学校	4 名（13.8%）			

日本人母の属性については、学歴は大卒が 17 名（56.7%）と最も高く、それに続いて大学院卒が 4 名（13.3%）である。つまり 7 割が大学以上である。

また母親の職業は主婦 16 名(53.3%)､に続き会社員 4 名(13.3%)、教師 2 名（6.7%）となっており、日本人母の半数が仕事を持たない専業主婦である。

次に日本人女性が台湾人夫と出会った場所についてその内訳を見てみると、「日本」9 名（30%)、「台湾」9 名（30%)、「欧米など第三国」9 名（30%)、無回答 3 名（10%）であった。

四、結果と考査

（一）日本語による言語活動状況

日台国際結婚家庭の子供たちは、日常的にどのくらい日本語に接しているのだろうか。また日本語による読書や勉強はどのくらい行っているのだろうか。ここでは子供たちの日本語による言語活動の状況を明らかにするために「日常的な日本語使用」と「日本語による読み書き」の結果を考察する。

[4] 国際クラスとはごく一部の現地公立小学校に設置されているクラスある。クラスの授業はすべて英語で行われ、カリキュラムも一般クラスとは異なる。このクラスへの編入には、両親のどちらかが博士であること、両親のどちらかが外国人であることなどが入学条件として設けられている。

1、「日常的な日本語使用」

ここでは未就学時・幼稚園時・現在の各時期における家族成員間言語使用状況及び日本語を話す友人がいるかについて結果をまとめた。まず子から母・父に対する言語使用状況を、表 2・表 3 に示す。

表 2　子から母親への使用言語　（N=29）

	全て中	主に中	日中両方	主に日	全て日
未就学時	0（0%）	2(6.9%)	4（13.8%）	8（27.6%）	15（51.7%）
幼稚園時	0（0%）	2(6.9%)	10(34.5%)	5（17.2%）	12（41.4%）
現在	0（0%）	2(6.9%)	5（17.2%）	10(34.5%)	12（41.4%）

表 3　子から父親への使用言語　（N=29）

	全て中	主に中	日中両方	主に日	全て日
未就学時	8（27.6%）	3（10.3%）	9(31.0%)	5(17.2%)	4(13.8%)
幼稚園時	11（37.9%）	5（17.2%）	8(27.6%)	3(10.3%)	0（0%）
現在	13（44.8%）	5（17.2%）	6(20.7%)	4(13.8%)	0（0%）

表 2 から、子どもたちは母親に対し全時期を通して概ね日本語を使用していることが分かる。注目すべき点は未就学時から幼稚園時にかけて、「すべて日本語」と答えた人が減少していることである。これは子どもが現地幼稚園に入ることにより中国語の接触量が増え現地語が強くなったためと思われる。また幼稚園時から現在における変化をみると、「日中両方」が減少し、「主に日本語」が増加している。これは対象者に日本人学校に通う子がいるため、幼稚園時には現地幼稚園に通い中国語が優勢になったものの、日本人学校への入学により再び日本語が優勢になったものと予想される。このように子供の言語使用は子どもの属する社会環境に如何に影響されるかということが示唆される。

次に子どもの父に対する言語使用について表 3 の結果を見ると、「主に日本語」「すべて日本語」と答えた人がいることから、日本語を母語としない父親に対しても日本語を使用している（していた）子どもがいることが分かる。特に未就学時においては「すべて日本語」で話した子が 13.8%いることから、幼少時の家庭内使用言語は日本語使用の傾向が見られる。

しかし幼稚園時には未就学児には見られた「全部日本語」がなくなり、5 割強の子どもが父親とは中国語を使用するようになる。ここから幼稚園、小学校という社会環境の変化によって父子間の使用言語が主要言語である中国語にシフトしつつあることが窺える。しかし現在でも「主に日本語」を使用する子が 13.8%いる。

以上表 2、表 3 の結果を合わせて全体的な傾向を見ると、幼少時には日本語使用比率が高いが、幼稚園から現在に至ると母には日本語、父には中国語と、相手により言語を使い分けがなされていく状況が見て取れる。とはいえ日中両方の言語を使用する子も少なからずいることがわかった。

それでは次に兄弟姉妹がいる子の、現在の兄弟姉妹間の使用言語について質問した結果を表 4 に示す。

表 4　現在の兄弟姉妹間の使用言語（N=23）

全て中	主に中	日中両方	主に日	全て日
3（13.0%）	4（17.4%）	11（47.8%）	3（13.0%）	2（8.7%）

この結果から約半数近くの子どもが日本語と中国語の両方を使用しており、日本語使用傾向のある「主に日本語」、および「すべて日本語」と答えた人は 5 名（21.7%）であった。この 5 名の通学校をを見るために学校別クロス統計を行ったところ、「主に日本語」、および「すべて日本語」と答えた 5 名は全て現地小学校に通っている子であった。日本人学校に通う子供 2 名は「日中の両方」を選択していた。これは当初、兄弟間で日本語を多く使っている子はおそら

く日本人学校に通う子であろうと予想していたのであるが、その予想とは異なる結果が示された。

次に親から子への使用言語についての質問結果を表 5、表 6 にまとめた。

表 5　母親から子への使用言語　（N=29）

	全て中	主に中	日中両方	主に日	全て日
未就学時	0（0%）	0（0%）	3(10.3%)	10(34.5%)	16（55.2%）
幼稚園時	0（0%）	1(3.4%)	6(20.7%)	7（24.1%）	15（51.7%）
現在	0（0%）	0（0%）	4(13.8%)	10(34.5%)	15（51.7%）

表 6　父親から子への使用言語　（N=29）

	全て中	主に中	日中両方	主に日	全て日
未就学時	8（27.6%）	3（10.3%）	9（31.0%）	7（24.1%）	2（6.9%）
幼稚園時	10(34.5%)	8（27.6%）	5（17.2%）	4（13.8%）	0（0%）
現在	13(44.8%)	7（24.1%）	4（13.8%）	4（13.8%）	0（0%）

まず母親の子どもに対する使用言語については、ほとんどの母親が子どもに対し日本語を使用していることが分かる。一方父親は主に中国語を使用しているが、日本語を使用する父親も数人いる。全体的に見ると親から子への使用言語は基本的に母親は日本語、父親は中国語であるが、現在において「主に日本語」を使用する父親が13.8%いることから、親から子への使用言語は日本語使用の傾向があることが示唆された。

次に日本語で会話する友人の有無についての質問結果である。

表 7　日本語で会話する友人の有無

いない	いるがあまり会わない	週に 1～3 回会う	週に三回以上会う
8（27.6%）	8（27.6%）	9（31.0%）	4（13.8%）

表 7 より、4 割程度の人が定期的に日本語を話す友人に会うと答えている。また通学校別にクロス統計を行ったところ、週に三回以上会うと答えた 4 名はすべて日本人学校に通う子供であった。その他現地校に通う子供は、おそらく休日に日本語教室等日本人コミュニティで友人と会う機会があると考えられる。

続いて日常の日本語を読む、書くという活動についての結果を見てみることにする。

2、「日本語による読み書き」

続いて「日本語による読み書き」項目中、ここでは小学校入学前の日本語の読み聞かせ、現在の日本語の本を読むか、また現在の日本語学習と日本語による教科学習の有無の結果を表にまとめた。

表 8　小学校入学前の日本語による読み聞かせ　（N=29）

行わない	週に三回（冊）以下	週に三回（冊）かそれ以上
3（10.3%）	10（34.5%）	16（55.2%）

表 9　現在日本語の本を読むか　（N=29）

行わない	週に三回（冊）以下	週に三回（冊）かそれ以上
9（31.0%）	13（44.8%）	7 名（24.1%）

表 10　現在の日本語学習と日本語による教科学習（N=29）

	行わない	週に三回（冊）以下	週に三回（冊）かそれ以上
日本語の勉強	4 名（13.8%）	16 名（55.2%）	8 名（27.6%）
日本語による教科学習	8 名（27.6%）	12 名（41.4%）	8 名（27.6%）

表 11　現在日本語で日記や手紙を書く（N=29）

行わない	週に三回（冊）以下	週に三回（冊）かそれ以上
17（58.6%）	4（13.8%）	8（27.6%）

まず小学校前の日本語による本の読み聞かせについて表 8 をみると、9 割近くが定期的に読み聞かせを行っていたことがわかる。また 55.2%が週に三回以上読み聞かせをしているとから、多くの家庭で頻繁に読み聞かせを行っていたことが分かった。そして現在でも 7 割近くの子どもたちが日本語の本を定期的に読んでいることが示された。

次に日本語学習については 82%の子が日本語を学習を実践しており、日本語での教科学習についても 69%の子どもたちが行っている[5]。しかし日本語での日記・手紙については、回数にかかわらず定期的に行っている人は 41.4%と半数以下であった。さらにこの「日本語での日記・手紙を書く」に関して通学校別にクロス統計を行ったところ、「週に三回（冊）かそれ以上」と答えた 8 人のうち、4 人は日本人学校に通う子供、残りの 4 人は現地小学校に通う子供だった。以上の結果から、多くの家庭では日本語の読み聞かせや読書、日本語の学習を行っていることが明らかになった。また日本語の識字完了年齢は 6 歳以前が 22 名（75.9%）、6 歳以後が 6 名（20.7%）、識字未習得が 1 名（3.4%）であり、7 割以上の子どもが小学校入学前に識字を完了していることも明らかにされた。

以上の「日常的な日本語使用」と「日本語による読み書き」の二つの結果を総合すると、まず「日常的な日本語使用」については、子は母に対して日本語を、父親に対して中国語を使用するという二言語の使い分けがほぼなされていること、また親から子に対する使用言語については、多くの母親は日本語を使用し、父親は概ね中国

[5] 学習形態は保護者のボランティア等の母語教室が 12 名（41.4%）、家庭内で保護者と行う人が 7 名（24.1%）であった。また教科科目は国語と算数が多い。

語を話すものの、日本語を併用している人も若干いること、また兄弟間では半数が日中両方の言語を使用していることが分かった。つまり家庭内使用言語の大まかな傾向として、母子間は日本語、父子間は中国語、兄弟間は日中両方を使用することが示唆されたのである。また半数近くの子は定期的に日本語を話すと友人に会っており、家庭外でも日本語を使用する機会があることが分かった。次に「日本語による読み書き」については、9 割近くの子が幼少時に日本語の読み聞かせを行っていたこと、また現在でも 7 割近くの子が継続的に日本語の本を読む習慣があること、また日本語の勉強も 8 割以上の子が継続的に行っていることが明らかにされた。

（二）在台日台国際結婚家庭子女の日本語会話力

それでは子女たちの日本語能力は如何なるものなのか。ここでは中国語と日本語の二言語能力を相対的に比較することにより、日台国際結婚家庭子女の日本語能力の状況を明らかにする。

表 12 は両言語の OBC テストの各平均得点と標準偏差、及び素点の満点に占める割合を基礎言語面、対話面と認知面に分けて示したものである。

表 12　日・中各言語の OBC 平均得点（N=29）

		基礎言語面（25 点）	対話面（25 点）	認知面（20 点）	合計（70 点）
日本語	平均得点 標準偏差	20.9 （83.4%） 3.54	19.7 （78.6%） 5.65	12.8 （63.8%） 5.60	53.3 （76.1%） 14.3
中国語	平均得点 標準偏差	21.3 （85.3%） 4.47	20.3 （81.4%） 5.45	14.0 （70.2%） 6.20	55.7 （79.6%） 14.9

まず平均得点の満点に占める割合を各タスクごとに見てみると、基礎言語面、対話面は各言語ともほぼ 79～85%と比較的高いレベルであることがわかる。それに対し認知タスクにおいては日本語が約 64%、中国語は 70%と平均得点がやや低くなる。これは日常的言語

力より認知的言語力の保持・発達が難しいというこれまでの多くの先行研究に符合する結果となった。

次に日本語と中国語間の各タスクの平均得点の差があるかどうかを見るため、対応のあるT検定を行った[6]（表13参照）。

表13　対応のあるT検定の結果（日本語と中国語）（N=29）

日本語－中国語	t値	自由度	有意確率（両側）
基礎言語面	-.697	28	.491
対話面	-1.030	28	.312
認知面	-1.681	28	.104
合計	-1.511	28	.142

表13の結果から、日中OBC各項目平均得点において有意な差は認められなかった。つまり子供たちの日本語能力は現地語である中国語とほぼ同等のレベルに達していることがわかった。

次に日中両言語能力間において相関関係があるかどうかを見るため相関分析を行ったところ、表14の示すとおり日中OBC得点の各項目において有意な正の相関が示された。

表14　日・中OBC得点間の相関分析の結果

基礎言語面	対話面	認知面	合計
.589**	.789**	.764**	.822**

これについて、日本語能力に影響するその他の要因と考えられる入国年齢と滞在期間の影響を考慮し、これらを統制した偏相関を求めたところ、基礎言語面においては相関が見られなくなったが、対話面ではr = .63**、認知面ではr = .61**と、合計r = .69**と、有意な相関が示された[7]。このことは二言語間において基礎的な日常会話

[6] T検定とは2グループ間の平均値に差があるかどうかを見る統計方法である。「t値」とは平均値の差を差の標準誤差で割った値。「自由度」とは制約されていない変数の数のこと、「有意確率（p値）」とは帰無仮説の下で実際にデータから計算された統計量よりも極端な統計量が観測される確率。簡単に言えばp>5%＝有意差なし　p<5%＝有意差ありということになる。

[7] r＝相関係数。この値が1に近づくほど相関が強い。

力より認知力に相互依存関係があるとした先行研究の（朱 2001）と同様の結果となった。

以上日台国際結婚家庭子女の日本語能力は中国語能力と相互依存の関係があることが分かった。ところで彼らの日本語能力は子女の通学校と関連があるのだろうか。これについて知るため、通学校と日本語会話力の間に相関関係があるかどうか見たところ、有意な相関が見られなかった（r = .23）。つまり通学校と日本語能力との間には関連性が認められなかった。

さらに通学校が異なることによって子女の日本語 OBC 得点に差が出るのかを、学校を独立変数、日本語 OBC 得点を従属変数として分散分析で調べてみた。その結果でも有意な差は認められなかった（F=1.354:　p>.05）。つまり現地校に通う子と日本人学校に通う子の日本語得点は差がないことが確認されたのである。

（三）「日常的な日本語使用」、「日本語による読み書き」と日本語能力との関係、及び日本語能力に影響する言語活動について

前述の結果において、日台国際結婚家庭の子どもたちは現地の主要言語である中国語とほぼ同等のレベルの日本語能力を有していることが分かった。先行研究の結果を踏まえると、このように高い日本語能力の保持・伸張を促した要因は、日常的に日本語にどの程度日本語に接しているか、また母親たちがどれだけ教育的サポートを行っているかに関連すると想定される。従ってここでは前述（一）で述べた「日常的な日本語使用」、及び「日本語による読み書き」の日常的言語活動が如何に日本語能力に影響しているのかを明らかにするため、「日常的な日本語使用」、及び「日本語による読み書き」と OBC 日本語得点間の相関分析を行う。さらに具体的にどの活動が日本語能力と関連するかを見るために、各尺度の下位項目と日本語能力の関係についても詳しく見ることにする。

1、「日常的な日本語使用」と日本語能力の関連性

「日常的な日本語使用」の項目については、下位項目 15 項目を取り上げ質問紙調査において質問した。家族間の言語使用についての

評価は〔1.すべて中国語、2.主に中国語、3.日中の両方、4.主に日本語、5.すべて日本語〕の 5 段階評価、また日本語を話す友人の有無については〔1.いない、2.いるがあまり会わない、3.週 1～3 回会う、4.週 3 回以上会う〕の 4 段階評価である。つまり評価の数値が高いほど日本語使用量が高いということになる。ここでは「日常的な日本語使用」として各下位項目の評定値の合計平均値、および各下位項目の各評定値を用い分析を行った。

まず「日常的な日本語使用」全体の合計点の平均値と OBC 日本語得点間の相関分析を行った。その結果、二者間において有意な相関が見られなかった。次に「日常的な日本語使用」各下位項目と OBC 日本語得点間での相関分析を行ったところ、「現在の子供の日本語使用」・「友人の有無」の項目において正の相関が認められた（表 15）。

表 15　現在の日本語使用・友人の有無と日本語能力の相関分析結果

	子が母に	子が父に	兄弟間	日本人の友人の有無
基礎言語面	.241	.383*	.601**	.594**
対話面	.243	.245	.543**	.561**
認知面	.372*	.390*	.658**	.511**

**相関係数は 1%水準で有意　*相関係数は 5%水準で有意

表 15 から、特に兄弟間の日本語使用量、日本人の友人の有無が日本語得点と最も相関が高く、次に子の父母に対する日本語使用量と続いていることが分かる。そして認知面においてはすべてにおいて優位な相関が見られる。ここから日常的な日本語使用が日常会話よりも認知力を必要とする高度な会話力と強い関係があることが示唆された。

次に別の分析方法として、各質問項目の評定値と OBC 日本語得点との間に有意な差があるかを、各質問項目の評定値を独立変数、OBC 日本語得点を従属変数として一元配置分散分析を行い調べた。

分析の結果 4 つの質問項目において有意な差が示された。その分析結果を評定値と日本語 OBC 得点平均値と共に以下①～④に示す。

①「幼稚園入学までの未就学時、父は子に何語で話したか」という質問において、基礎言語面で「主に日本語（M=23.0)」と「日中半分（M=17.89)」の間に、対話面で「主に日本語（M=22.86)」、「すべて中国語（M=22.5)」と「日中半分（M=18.0)」との間に、認知面で「主に日本語（M=16.86)」と「日中半分（M=8.11)」の間にそれぞれ 5%の水準で有意差が見られた[8]。

②「幼稚園の時、子は父に何語で話したか」という質問において、対話面では「主に日本語（M=25.0)」、「主に中国語（M=23.0)」と「日中半分（M=15.0)」の間に、また認知面では「主に日本語（M=18.0)」が「全部中国語（M=10.82)」「日中半分（M=9.88)」との間にそれぞれ 5%の水準で有意差が見られた[9]。

③「今兄弟間で何語で話すか」の質問において、基礎言語面では「全部中国語（M=15.0)」と「主に日本語(M=23.00)」の間に、認知面では「主に日本語（M=18.67)」、「全部日本語（M=17.00)」と「全部中国語（M=3.67)」の間にそれぞれ 5%の水準で有意差が見られた[10]。

④「子は日本語で会話する日本人の友人がいるか」という質問では、「いない」とそのほかの「いるがあまり会わない」、「週 1～3 回会う」、「週 3 回以上会う」の間に、基礎言語面、対話面、認知面及び合計得点において有意水準 5%で有意差が認められた。この結果を質問項目評定値別に表 16 にまとめた。

[8] 基礎言語面:F=3.604 p=.019 対話面:F=4.442 p=.008 認知面: F=4.477 p=.008。F とは統計的検定量。
[9] 対話面:F=4.267 p=.016 認知面: F=3.423 p=.034
[10] 基礎言語面: F=3.491 p=.028 認知面: F=4.781 p=.008

表 16　④「日本人の友人と会う頻度」別日本語 OBC 平均得点

	いない	いるがあまり会わない	週 1～3 回会う	週 3 回以上会う
基礎言語面 (F=6.96 P=.001)	17.25	22.00	21.67	24.00
対話面 (F=5.467 P=.005)	14.13	21.13	21.56	23.50
認知面 (F=5.616 P=.004)	7.13	15.00	14.56	15.50
合計 (F=6.497 P=.002)	38.50	58.13	57.78	63.00

以上有意差が認められた 4 項目について注目すべき点について述べると、まず①および②の質問で、父子間双方の使用言語が「日中半分」と答えた人の日本語点数がいづれも低かったことである。つまりこれは中島の調査で家庭内で両言語をランダムに使用する「混用型」の子供は、親が意図的に日本語使用を強要している子どもより日本語の会話力、作文力が劣るという結果と一致する（中島 2002）。つまり一人の相手に対して日本語と中国語を混ぜて話すことが、日本語能力の発達に良い影響を与えないということが予想されるのである。前述の「日常的な日本語使用」全体の合計平均値と OBC 日本語得点との間に相関が見られなかったという分析結果からも示されたように、日本語接触量を単に増やすだけでは日本語能力には影響しない。つまり重要なのは一人の相手に対して、ここでは特に父子の間で二言語を混用せずはっきりと使い分けをすることを前提にした上で、日本語使用を増やしていくことが、日本語能力を伸ばす重要な鍵であると示唆されたのである。

次に④の質問で家庭外で日本語を話す日本人の友達がいないと答えた人は友達がいる人よりも日本語得点が低かった。ここから家庭内の日本語使用だけでなく、台湾社会内の日本人コミュニティへ参加することで日本語で会話する機会を多く作ることも、子供の日本語力を強めるために重要な要因であることが示唆された。

2、「日本語による読み書き活動」と日本語能力の関連性

「日本語による読み書き活動」の項目については、下位項目 8 項目を取り上げる。これら各項目は〔1.行わない、2. 週に三回（冊）以下、3. 週に三回（冊）かそれ以上〕の 3 段階評価である[11]。ここでは「日本語による読み書き活動」として各下位項目の合計平均値、および各下位項目の評定値を用い分析を行った。

まず「日本語による読み書き活動」全体と日本語能力の関連を相関分析で調べたところ、基礎言語面との間に有意な正の相関がみられた（表 17 参照）。これより、日本語での読み書きを多く行うことが日本語会話力に有効であることが示された。さらに具体的にどの活動が最も日本語能力と関連しているのかを、各下位項目に相関分析を行った。その結果「日本語での手紙や日記を書く」と OBC 日本語得点の基礎言語面との間に有意な相関が認められた。

表 17「日本語による読み書き活動」全体及び「日本語での手紙や日記」と OBC 日本語基礎言語面得点の相関分析結果

「日本語による読み書き活動」全体		日本語での手紙や日記	
相関係数	有意確率	相関係数	有意確率
.483**	.008	.416*	.0025

**相関係数は 1%水準で有意　*相関係数は 5%水準で有意

さらに日本語での手紙や日記を書くことと日本語力に関して詳しく調べるために「日本語での手紙や日記」の評定値を独立変数、日本語得点を従属変数として一元配置分散分析を行ったところ、基礎言語面では「週に三回かそれ以上」と「行わない」、「週に三回以下」の間で、対話面では「週に三回かそれ以上」と「週に三回以下」の間で、認知面では「週に三回かそれ以上」と「行わない」の間で、合計得点では「週に三回かそれ以上」と「週に三回以下」の間でそ

[11] 識字年齢については〔1.日本語識字未習得、2. 6 歳以降、3. 6 歳未満〕の 3 段階評価である。

れぞれ有意水準 5%で有意差が認められた（表 18）。つまり日記や手紙等書くという作業は会話力の発達にも良い影響を与えることが示唆されたのである。

表 18「日本語での手紙や日記」と日本語 OBC 平均得点

	行わない	週に三回以下	週 3 回以上
基礎言語面 （F=5.171 P=.013）	20.06	18.50	23.75
対話面 （F=5.365 P=.011）	19.24	13.75	23.50
認知面 （F=3.616 P=.041）	11.65	9.5	16.75
合計 （F=4.835 P=.016）	50.94	41.75	64.00

五、まとめと今後の課題

本稿では在台日台国際結婚家庭子女の日本語による言語活動と日本語能力の関係を分析し、その日本語能力の伸張・保持にかかわる要因について検討してきた。その結果を研究課題順にまとめた。

1. 日常的な日本語使用の傾向として、家庭内では日常的に日本語が使われている。子は母に日本語を、父親に対し中国語を使用する。一方母は子に日本語を、父は概ね中国語を話すものの、日本語を併用する父親もいる。兄弟間では日中両方の使用が多い。また定期的に日本語を話す友人がいる子は半数近くであった。次に「日本語による読み書き」については、9 割近くの子が幼少時に日本語の読み聞かせを行っていた。また現在は 7 割近くの子が継続的に日本語の読書習慣を持ち、日本語の勉強も 8 割以上の子が行っている。

2. 子供たちの日本語能力は現地語の中国語とほぼ同等のレベルに達している。また日中能力の両言語間において相関関係があり、特に対話面、認知面で相互依存関係が認められた。通学校と日本語能力の間には関連性が認められず、また現地校に通う子と日本人学校に通う子の日本語得点には差がなかった。

3. 日本語能力と関連が認められた言語活動は、①兄弟間の日本語使用量、②日本語を話すの友人の有無、③父親・母親に対する日本語使用状況、④日本語の読み書き学習量、⑤日本語で日記・手紙を書くことである。そのうち③に関して、父から子、或いは子から父の間において日中両方を使用する子女の OBC 平均点が低かったという結果から、二言語混用は日本語能力に良い影響を与えないことが示唆された。

以上の結果を踏まえて家庭内での日本語能力を伸ばす具体的なポイントは、子どもが幼稚園や小学校に入学しそれを契機に日本語より中国語を多く使うように社会環境が変化しても、家庭でできるだけ日本語に接する環境をつくることである。それには兄弟姉妹間の会話の日本語使用を習慣づけさせること、また母親と共に父親も日本語を使用することも子どもの日本語接触量を増やすための一つの方法である。しかしその場合には日中混用を避け、日本語使用を徹底することが重要である。それができなければ量的には日本語量が少なくはなるが、母は日本語、父は中国語と使い分けをする方が良い。また家庭以外でも日本語を話す日本人の友達と接する機会をより多く持てるよう、育児サークルや日本語教室等の日本人コミュニティに子供を積極的に参加させるよう心がけることが大切である。また日常的に読み書き学習を継続的に行い、特に日記や手紙を書かせる習慣をつけさせることが、子女の日本語能力伸張と保持に有効な方法となるだろう。

本研究では日本語による言語活動と日本語会話力との関係について考察した。一般に言語能力というのは聞く話す読む書くという 4 つのスキルに分けられ、今回の調査ではそのうち聞く・話すという会話力について検討したのみである。そのため今後の課題としては読み書き能力についてさらに研究を進める余地があるという点だ。また今回の調査では対象者の人数、居住地域が限られていたため、本研究の結果はあくまで在台日台国際結婚家庭子女の日本語会話力の一傾向を示したに過ぎない。そのため今後も引き続きデータの収

集、分析と検討を続けて行きたいと思っている。

今まで多くの日本人母から「どうしたら子どもの日本語が上達するのか、どのような方法がいいのか分からない」といった疑問や悩みの声を幾度も聞いてきた。本研究を通してそんな母親の疑問に対し、一筋の道を示すことができれば幸いである。

参考文献

本間美穂(1996)「異國情, 異域結－在台台日通婚的現況及問題之探討」國立台灣大學新聞所碩士論文

カナダ日本語教育振興会(2000)『子どもの会話力の見方と評価バイリンガル会話テストの開発－』凡人社

朱睨淑(2001)「韓国語・日本語の二言語環境にいる韓国人児童の二言語能力－母語保持を中心に－」(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科言語文化専攻日本語コース修士論文)

中島和子(2002)『バイリンガル教育の方法－12 歳までに親と教師ができること』アルク出版

本間美穂(2002)「台湾における日台婚姻家庭の継承日本語教育の現状－その動機、学習形態と問題点－」『日語系較學問題之探討]研討會論文集 2002 年 11 月』 銘傳大學應用文學院應用日語系

朱睨淑(2003)「日本語を母語としない児童の母語力と家庭における母語保持:公立小学校に通う韓国人児童を中心に」『言語文化と日本語教育 26』pp.14-26

朱睨淑(2003)「外国人児童の母語保持・育成に関わる要因会話力テストの結果から」『言語文化と日本語教育 30』p.11-20

竹下修子(2004)『国際結婚の諸相』学文社

李若玫(2005)「日台国際結婚における言語使用について－ある二世の事例を中心に－」南台科技大学応用日語研究所修士論文

金戸幸子(2007)「現代台湾における日本人の動態とその新たな展開－台湾でキャリア構築を目指す越境動機の分析を中心として－」『《現代台湾研究》第 32 号 9 月』pp.20-45

陳麗君（2007）「跨國婚姻中的語言意識和語言使用—台南市日籍和東南亞籍配偶家庭的比較」『跨領域對談全球化下的台灣文學與文化研究國際學術研討會』 台湾国立成功大学

呉天泰（2008）『多元文化』二魚

小田利勝（2009） 『ウルトラビギナーのための SPSS による統計解析入門』プレアデス

呉明隆・涂金堂（2009） 『SPSS 與統計應用分析』五南

服部美貴（2009）「日台国際児の日本語の話し言葉に関する一考察」『台大日本語文研究第 17 期』pp.85-114

穆紅（2009）「言語少数派の子どもの継続的認知発達の保障－生態学的支援システムの構築に向けて－」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻博士論文

伊藤佳代（2011）「日台国際結婚日本人女性配偶者の言語教育観－現地への愛着、定住の決意、言語能力との関係を中心に－」『2011 年應用日語教育國際學術研討會[日語・日本研究之回顧與展望] 論文集』国立高雄第一科技大学